

子ども・若者ヒアリング結果概要

1 開催日時等

(1) 実施期間：8月27日(水)～10月11日(金)

(2) 実施日及び出席委員：

名称	日時	出席委員
第1回部会	8月27日(水) 10:00～11:35	小沢座長、加藤委員、流石委員、塩川委員
第2回部会	8月29日(金) 11:10～11:50	小沢座長、神戸委員、村井委員、杜委員、山内委員
個別ヒアリング	9月12日(木) 16:30～18:40	小沢座長、山内委員
第3回部会	9月21日(土) 9:30～11:10	小沢座長、塩川委員、田中委員、村井委員
個別ヒアリング	9月27日(金) 10:10～10:40	小沢座長
第4回部会	9月28日(土) 10:00～11:10	小沢座長、神戸委員、流石委員、杜委員、山内委員
個別ヒアリング	10月11日(金) 11:00～11:30	※事務局のみ

(3) ヒアリングを実施した当事者等：

・当事者 約10名

※年代別内訳 小学生数名、中学・高校生2名、大学生2名、20歳代4名

・支援者 4名

2 主な意見

【悩みごと(改善できたことを含む)について】

- ・母子会が企画する遠足などに参加することで、自分と同じような境遇の子がいることを知り、母子家庭だから旅行に行けないという疎外感がなくなった。
- ・高校の入学準備の時期が、一番お金が必要で家計を圧迫した。
- ・学校では、休む理由を聞かれるのが苦痛で、なかなか休めなかった。
- ・(家族の世話などで忙しく) 学生時代にもう少し気持ちに余裕があれば、進学先などいろんなことにも目が広がったのかと思う。
- ・学校では、気の毒に思われるのが苦痛で、そっとしておいて欲しかった。
- ・家庭では家事を強要されたりすることはなかったが、母親が病気を抱えていたこともあり、朝ごはんがないなどで生活リズムが乱れがちであった。
- ・生活保護受給者の困りごとの基本は金銭面。また、子どもたちが他の家庭と違い旅行などの経験が少なかったりする可能性はある。

【自分の支え（助け）になったもの（人、支援制度など）について】

（当事者から）

- ・ こどもの居場所に参加することで、他人とのかかわり方など成長を感じることができた。
- ・ しんどい時の支えになっていたのはネットゲーム。昼夜逆転で生活リズムが乱れることもあったが、一晩中友達とゲームをすることが日常からの逃げ道になっていた。
- ・ 祖母や母が介護保険や障害福祉のサービスを受けており、それによって、自身は家族のケアから離れ、現在一人暮らしができています。
- ・ 所属する団体での活動を通じて、支援している高校生たちからも頼りにされたり、悩みを相談してくれることが、自分にとっても心の支えになっている。
- ・ 公的な制度だけでは支援を受けている立場から抜け出せないなので、人との関り持てることも食堂のような場所が増えると良いと思う。
- ・ 所属していたスポーツチームのコーチからありのままの自分で良いと声をかけてくれたことにより、精神的に楽になり、自分が変わるきっかけにもなった。
- ・ 地域の子ども食堂でのボランティア活動などを通じて、支援を受けている子どもが他にもいると分かり、自分も救われた気持ちになった。
- ・ 通信制は、アルバイトをしたり学校外の経験を多く積めるところがよいところ。
- ・ 生活福祉資金貸付や、子どもが小さい時に自分（保護者）が病気だったので、母子医療制度が利用できたことは本当に助かった。
- ・ 子ども食堂では、子どもは各々のペースで過ごしており、心地の良い空間になっているようだった。また、外国籍の子も多く参加していたが、他の子どもとも親しく交流していた。

（支援者から）

- ・ こどもの居場所は、子どもたちが日頃親に甘えきれない部分を補っている場だと感じる。ただし、子どもたちが心を開くには時間がかかるので、各回の人数を減らして開催日数を増やすなどして、より個別対応ができるようにした方がよい。
- ・ こどもの居場所など、当事者が気軽に長期的に関われる場所が重要で、子どもと年齢の近いスタッフがいて、愚痴を聞いてあげたり、ふとした時に本音をこぼせることで、ストレスを和らげる役割を果たせていると思う。こうした場所が増えていくことが大事。

【相談窓口について】

（学校関係）

- ・ スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーのことは在学当時知らなかったが、知っていれば利用したかった。
- ・ 学校ではカウンセラーもいたが、関係性がなかったので利用しにくかった。

- ・ 日常の相談相手は祖父母や学校のスクールカウンセラーだった。カウンセラーとは、学校で全員が一度ずつ相談する機会をきっかけに繋がり、週に1度、家族や学校のことを相談することで体が軽くなりリラックスできた。

(行政関係)

- ・ 休養中（ひきこもり状態）から通い始めた行政の支援機関に週に1回行き、1週間のできごとなどを話し、悩みを聞いてもらったり、今後の相談に乗ってもらっている。親身に対応してくれるので自分にとって心の支えになっている。
- ・ 子どもが自分から直接行政の相談窓口アクセスするのはハードルが高い。
- ・ 相談に行っても、他の相談窓口を紹介されたりして、転々とするが多かった。
- ・ 母の関係で行政の支援者とも接する機会があったが、相談したことを全て親に伝えるのではなく、秘密を守るなど、プライバシーに配慮して聞いてくれたら楽だった。

(その他)

- ・ 相談相手は施設のスタッフさんだった。幼少期から入所していたこともあり、自分の性格をスタッフや周りの子が理解してくれており、施設での居心地は良かった。
- ・ 子どもの事での相談はフリースクールの方にお世話になっている。

(支援者から)

- ・ 子どもたちは、大勢の人がいる中や、会ったことや関係性が無い人がいる中では、本音や家庭のことを話すことが難しい。
- ・ 保護者が、自身の学歴から子どもを進学させる必要性を感じておらず、貧困の連鎖が懸念されるケースや、不登校のまま高校に進学していない子どもに将来と自立をつなげて話すことが難しいケースなど、苦労したところ。
- ・ 支援が必要な家庭は自分から相談窓口につなげられないので、ケースワーカーが相談の入り口になることが大事であるが、世帯主に会うことが基本で、子どもと直接接する機会は少ない。
- ・ こどもの場合、支援機関の窓口で自分からつながることのハードルは高く、自分の状況を言語化できるのが18歳以上との印象。

【支援に係る情報の入手方法や提供について】

- ・ 高校の先生から、家庭状況を踏まえて奨学金を紹介してもらい、私立大学の選択肢を持つことができた。
- ・ 地域の中で誰か1人でも頼りになる人がいれば情報は得やすくなる。また、デジタル分野の広告などを強化することで、現世代の子育て家庭の親子には情報が届きやすくなるのではないか。

- ・学校の教室の後ろなどに貼ってあるポスターは、先生や友達に知れずに自分で情報にアクセスできるので、繋がりやすいと思う。
- ・支援機関は自分でネットから探した。周りの人から紹介されることでアクセスのきっかけになると思うが、相談窓口自体がもっと目立つとアクセスしやすいと思う。
- ・高校時代は制度の情報が入ってきにくいので、高校の先生からの紹介がなければ奨学金などの制度が利用できなかったと思う。先生からの情報提供が大事。ホームルームなどで制度の周知をしてくれると利用につながりやすいのではと思う。
- ・学校の先生から紹介してもらって、フリースクールへ行くようになった。
- ・生活保護世帯の子どもへの具体的な働きかけとして、生活困窮者向けの学習支援を案内したり、家から出られない子どもにはひきこもりの支援担当者と一緒に訪問したり、高校に行かずに働きたい子どもへ職業訓練を案内することもあった。

【あったら良いと思う支援制度・サービスについて】

(相談関係)

- ・同じような経験をしている年齢が少し上の方だと悩みごとを相談しやすいので、学生時代にそういった人と交流できる機会があればよかったと思う。
- ・夜に仕事などで親が不在の時は、精神的にもしんどかったので、話を聞きに来てくれたり、夕飯を作りに来てくれるサービスがあれば心強かった。
- ・自分と同じ境遇・年代の人と交流できる場所があればよいと思う。また、好きな時に登録なしでも利用できる自習室のような居場所があると利用しやすい。
- ・利用できる社会資源の紹介と心のケアは両輪で進める必要があるので、相談窓口などに精神分野の専門家が配置できると望ましい。また、就労につなげる要素も重要。
- ・同じ世代や境遇の人には相談しやすいため、行政には当事者同士が関わりあえる場を作ってほしい。
- ・現在、学校の先生に相談できるのは、登校日の放課後くらいなので、相談できる機会がもっと増えると良い。
- ・(授業を持たず) いつでも好きなタイミングで相談できる先生がいるとありがたい。
- ・子も親も同じような境遇の人と交流できる機会があればありがたい。

(経済的支援)

- ・就職活動時に東京など遠方に行く際の滞在費などの金銭援助のサポートがあれば、企業の選択肢を狭めなくて良くなるので、ありがたい。
- ・地方から来ている大学生に対しては、家賃補助などが大事だと思う。

(見守り・サポート体制)

- ・施設内で自分を認めてもらった上で、外部に出て人と関わる経験をするという段階を踏むことが大事で、外に出てつまずいた時に支えてくれる仕組みがあると良い。
- ・低学年の子どもが通える範囲は限られるので、居場所の数が府内で増えるとよい。
- ・自分から動いて働きかけないと支援につなげれないのが現状。また、困りごとが解決すると関係性も切れてしまうので、継続的に伴走支援してもらう制度があると良い。
- ・18歳を超えると公的な支援が少なくなるので、若者向けの支援を充実してほしい。
- ・ヤングケアラーの負担を間接的に軽減するために、養育している家族への支援が重要。

(手続き等)

- ・支援制度の申請について、人によってデジタルと紙とで使いやすさが異なる。また、申請に当たり、親の収入や自身の体験など答えにくい項目は削除するなど、改善を検討してほしい。
- ・手続きのため、色々な場所に行かなければならず、奨学金も似た名称が多く苦労したので、改善してほしい。

【支援する側の留意点等について】

- ・支援スタッフが、子どもからきつい言動を受けることがあり、スタッフがストレスを抱えたときは、スタッフ同士が、反省会を通じてお互いにフォローしたり、対策を検討するため運営者とLINEで相談するなど、スタッフの心身のケアも必要。
- ・支援スタッフが、子どもと世代が近かったり、当事者としての経験がある場合、子どもたちは話しやすい環境になるが、逆にデメリットとして、(距離感が近くなり過ぎて) 馴れ合いがおきてしまい、うまく支援できなかったことがある。
- ・子ども食堂は困窮家庭が行く所とのイメージがいまだにあり、参加させない親もおり、本当に支援が必要な子どもは食堂に参加できていないと感じる。
- ・(子ども食堂の) 開催日数を増やしたいが、スタッフの体制が十分ではなく、運営費も行政の補助で賄えるのは半分程度なので難しい。
- ・ケースワーカーとして、要保護児童対策地域協議会のケース会議に参加し支援方策を検討することもある。